

第192回 「元気に百歳」クラブ俳句サロン「道草」開催

コロナ禍の蔓延は、なお止まる気配はありません。皆さんが「三密」を遵守し、マスクの使用、手洗い励行を当季雑詠続けることで、今月も11月6日（金）、新橋ばる一にて「道草」句会を開催することが出来ました。今回参加されたのは、芦川創風さん、井上蒼樹さん、奥田和感さん、金田月草さん、君塚明峰さん、木村栄女さん、辻柴楽さん、中島憧岳さん、原晶如さん、森田多佳さん、芦尾白然の総勢11名でした。そして投句では、板倉歌多音さん、住田幸佳さん、船戸清助さんの3名が、参加して下さいました。

住田先生は冒頭に、テレビ番組の「プレバト」での俳句の楽しみ方や、出演者が作句するのに発するウイットの豊富さと努力のことを話され、さらに「五七五」の形から少し外れて、破調で独特のリズム感を持つ、「自己表現」を重視した作句法についても触れられた後、これとは対象的に、私たちの「道草」俳句が「有季定型の伝統俳句」を、重視していることを再確認されました。私たちも日常使われる平易な語で、詩的な情景が、有季定型の表現の中で詠むことが出来ればと、日夜心がけています。

さて本日、住田先生が提示された席題は次の通りです。

席題1. 「冬来る」又は「冬に入る」

席題2. 「牡蠣」

自由題 当季雑詠（晩秋、初冬）

一瞬緊張の走るプレーボールです。しばし静かな時間が経過し、皆さんが句を詠むことに傾注した後、一時間ほどの時間が流れ、皆さんの俳句が詠まれます。そして、いつものように先生が短冊に読まれた句を清書され、これを吟味して皆さんが、選句という時間を過ごした後、天賞並に最多得票賞に輝いた句は、下述の通りです。なお、六月の通信句会を経験してからは、皆さんが選句した天賞句を、「なぜ天賞句に選句したのか」の感想を記述することになっています。

席題1. 「冬来る」又は「冬に入る」

- | | | |
|-------------------|----|-------|
| ◎『片手あげ振り返らぬ子冬に入る』 | 多佳 | 天2 |
| ◎『指先に保湿クリーム冬に入る』 | 和感 | 天1 ☆5 |

席題2. 「牡蠣」

- | | | |
|-------------------|----|-------|
| ◎『牡蠣を剥く海女の節々確かなり』 | 栄女 | 天2 ☆4 |
| ◎『厚岸に北方の風牡蠣の山』 | 晶如 | 天1 |
| ◎『初牡蠣や先ずは四個を注文す』 | 白然 | 天1 |
| ◎『牡蠣鍋や夫婦喧嘩は湯気の中』 | 多佳 | ☆4 |

当季雑詠の自由題（＝晩秋、初冬＝）

- | | | |
|--------------------|----|-------|
| ◎『路地裏にかくれんぼして石露の花』 | 多佳 | 天2 |
| ◎『初冬や鎮座百年祝う杜』 | 和感 | 天1 ☆6 |
| ◎『葉の先に深まる秋を見つたり』 | 蒼樹 | 天1 |
| ◎『マスクして十歳若く見える女』 | 明峰 | 天1 |

（道人の一句）

コロナ禍や牡蠣の到来遠ざかる 住田道人

席題1. では、多佳さんの句「片手あげ振り返らぬ子冬に入る」が、天賞二つを獲得しました。これはきっとご子息でしょうが、母親のかけた声に、背を向けたまま、振り返り

もしないで出かけていく姿をキャッチした景でしょう。息子の母親への照れた愛の仕草で
しょうか。後ろ向きながら、温かく優しい挙手で答えたのですね。次に和感さんの句「指
先に保湿クリーム冬に入る」が、天賞一つと最多得票賞（☆印）を獲得しました。冬を迎
えたときに心がける肌荒れ防止への極めて明快な一句ではないでしょうか。何の説明も要
らないと思います。保湿クリームが手肌に沁みとおっていく実感が伝わってきます。

席題2. では、栄女さんの句「牡蠣を剥く海女の節々確かなり」が、天賞二つと最多得
票賞（☆印）獲得しました。バイタリティ旺盛な海女さんの牡蠣を剥く技の確かな運びと
逞しい腕の節々の強靱さが見えるようです。「海女」が春の季語であり「季重なり」にな
っていることを、栄女さんも気になさっていましたが、この場合は許されるのではないで
しょうか。次に晶如さんの句「厚岸に北方の風牡蠣の山」が、天賞一つを獲得されました。
厚岸の漁港の景、下五の「牡蠣の山」という表現に、港のバイタリティと素朴さが見えて
くるようで、選者はそこに共感したのだと思います。もう一句、白然の句「初牡蠣や先ず
は四個を注文す」が、天賞一つをいただきました。初牡蠣の中毒を恐れる控えめな気持ち
が選者の共感を頂戴しました。天賞はありませんでしたが、多佳さんの句「牡蠣鍋や夫婦
喧嘩は湯気の中」が、最多得票賞（☆印）を獲得しました。牡蠣鍋で夫婦げんかもなかな
おり、温かい一句でした。

自由題でも、多佳さんの句「路地裏にかくれんぼして石菫の花」が、天賞二つを獲得し
ました。上五、中七の「路地裏のかくれんぼ」が、季語の「石菫の花」を見事に活かして
いるのではないのでしょうか。「石菫の花」は、比較的ひっそりとした路地裏とか裏庭に、
鮮やかな黄色の花をアピールしますが、多佳さんはそこを、子供の「かくれんぼ」という
遊びで、見事に捉えました。多佳さんは、今日は三句とも入選されました。大拍手です。
次に和感さんの句「初冬や鎮座百年祝う杜」が、天賞一つと最多得票賞（☆印）を獲得し
ました。中七の「鎮座百年」の鎮守様が、周囲の杜に見守られつつ百年の安泰を続けてき
たという句になっています。句会の席上、選句を披露するときに判明したのですが、こ
の句が和感さんの詠まれた句と知り、「鎮座百年」が明治神宮であることが判明し、百年
の思いが一層迫力のあるものであると判明しました。実に印象深い句になりました。

次に蒼樹さんの句「葉の先に深まる秋を見つけたり」が、天賞一つを獲得しました。私
たちは俳句を学ぶようになって、時の移りと共に変化する自然、動、植物の態様の変化に
注意が行くようになりました。蒼樹さんのこの句も、まさにその日常生活が、物語られて
いるように思います。木々の葉の先に現れた葉の色艶の変化、勢いの変容に、「深まる秋
＝寂寞感」を見つけられたのですね。選者はここに一票を投じられました。

もう一句、明峰さんの句「マスクして十歳若く見える女(ひと)」が、天賞一つを獲得しま
した。このコロナ禍の蔓延で、マスクをすることは日常的になり、その暮らしの一コマを
捉えられました。読んで思わず「これもあるなあ」と、微笑む一句です。選者の共感をい
ただきました。

二か月続けて「新橋ばる一ん」で「道草」句会が開催できました。喜ばしいことではあ
りますが、これがまた以前のように、毎月何の問題もなく開催できることを、祈念するば
かりです。昨今の世情を見ましても「第三波襲来」が、取り沙汰されています。地道なよ
うですが、不要な「三密」を避け、手洗い、マスクの着用、ソーシャル ディスタンスの維
持を厳守しつつ、ワクチンの完成を待ちましょう。でも12月4日（金）は、また「新橋
ばる一ん」に、集合できることを祈念しつつ。

白然（記）